

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

庭園文化にみる京都と平泉

—御室地域と毛越寺—

前川佳代

はじめに

平泉の世界遺産登録の重要なファクターとなった「浄土庭園」の源流は京都である。奥州藤原氏三代秀衡が建立した無量光院は、「悉以所_レ摸_二宇治平等院_一也」(『吾妻鏡』文治五年九月十七日条「寺塔已」下注文)。以下、「注文」と略す)、また「摸_二宇治平等院地形_一之所也」(『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条)とみえ、宇治の平等院とその地形を模倣したことがしられる。発掘調査においても、若干の違いはみられるものの建築や庭園の形態はほぼ合致するとみてよい(前川・島原二〇一四)。

しかしながら、筆者は平泉の浄土庭園の系譜の一つを奈良の興福寺の末寺の庭園に求めたことがある(前川二〇一一)。造庭者は、興福寺に入寺した撰閔家の子弟で、平泉との関係がうかがえた。

かつて角田文衛氏は中央政界とのコネクションの中で平泉文化が形成されたことを明らかにされた（角田一九八七）。平泉の庭園文化もまた、京都と平泉の密接な人的関係を示している。本稿では平泉の庭園造りにかかわったとみられる人たちを見出し、毛越寺庭園の造営者を推測し、京都の御室地域と平泉毛越寺周辺を比較してみたい。

一、平泉の浄土庭園の造営者

興福寺一乗院の末寺である京都府木津川市の浄瑠璃寺の庭園は、一乗院恵信によって造られた。その池は平泉の観自在王院の池と同形である（図一）。『浄瑠璃寺流記事』によれば、恵信が浄瑠璃寺の結界を定め、池を掘り石を立てたのは久安六（一一五〇）年で、保元二（一一五七）年には九体阿弥陀堂が池の西岸に移築された。観自在王院は、二代基衡の妻が建立した（注文）。当地には基衡の邸宅が営まれていたと考えられており、保元二年（永暦元（一一六〇）年頃）に基衡が亡くなったあと喜捨して造ったという。同院建立時に池が造られたとすると、浄

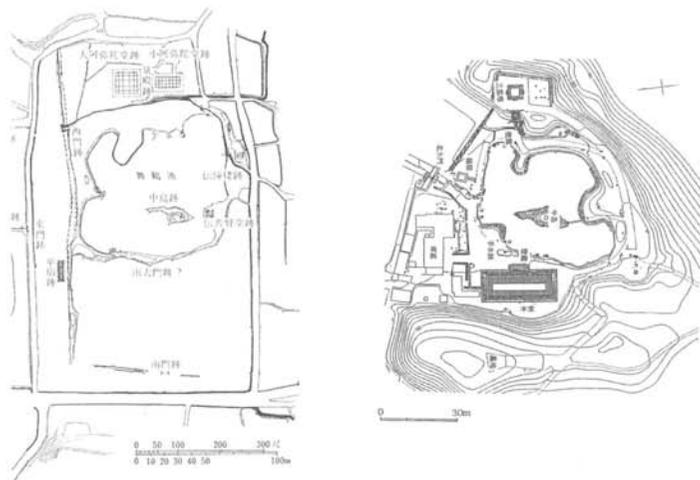


図1 観自在王院・舞鶴が池と浄瑠璃寺庭園（前川2008）

瑠璃寺の池庭に後出する。⁽¹⁾

浄瑠璃寺の池の形が観自在王院で採用された背景は、恵信の出自に求められる。恵信の父は撰関家藤原忠通で、母は清衡期の陸奥守藤原基信（一一一六―一一二一在任）の女である。忠通は、毛越寺金堂・円隆寺の額を染筆しているし（『注文』）、撰関家藤原氏と奥州藤原氏の関係は初代清衡に遡る（丸山二〇〇五）。基信は、父師信・兄経忠が白河院の近臣という家柄の出身である（遠藤二〇〇五）。庭園史家の森蘊氏は恵信が忠通男であることに注目し、撰関家の子弟が門跡になった大乘院において披見されたであろう『作庭記』が造庭の参考にされたと推測して、浄瑠璃寺庭園を『作庭記』流庭園と称して良いとされる（森一九五九）。

いま一つ、奈良市柳生にある円成寺と、平泉の花館廢寺と下段の花立溜池（筆者は両者を一つの伽藍とみなして花館伽藍と称している）の地形が似通っていることもあげられる（図二・三）。円成寺の浄土庭園は仁和寺で得度した寛遍によって十二世紀半ばに造られたとされる（『知恩院縁起』）。この寛遍は村上源氏源師忠の男で、母は源政長の女という（『今鏡』むらかみの源氏第七）。仁和寺で得度し、広沢六流の一つ忍辱山流の祖とされた東密僧で、東寺長者、東大寺別当を経て大僧正になり仁和・円教両寺別当に補され、忍辱山大僧正と呼ばれた。天養元（一一四四）年には覚法法親王の推挙により権大僧都になっている。この覚法法親王は、毛越寺の額の揮毫を藤原忠通に依頼した人物である（『古事談』第二）。

これより以前、初代清衡段階に東密の仁和寺流の僧が中尊寺にかかわっていた可能性を司東真雄氏が指摘されている（司東一九五四）。また行範という仁和寺僧が陸奥に住したことも明らかとなっている（遠藤二〇一六 誉田二〇一四）。以上から、花館伽藍の池は仁和寺関係者の造庭の可能性がある。

平泉には、撰関家関係者による『作庭記』流庭園と、仁和寺関係者の手によると考えられる庭園が確認される。

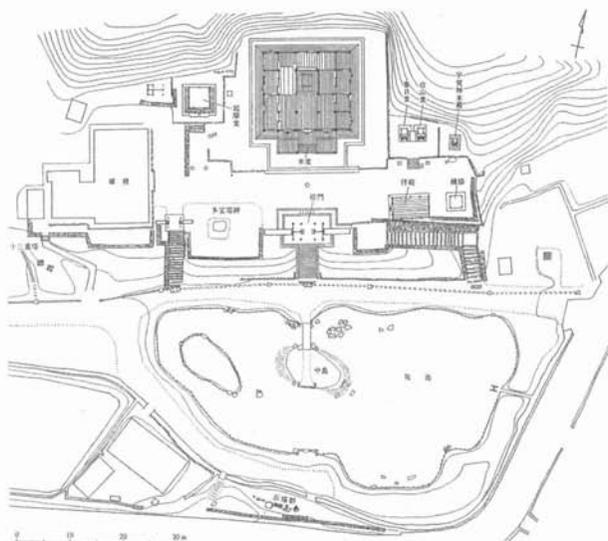


図2 円成寺実測図（「大和古寺大観」）

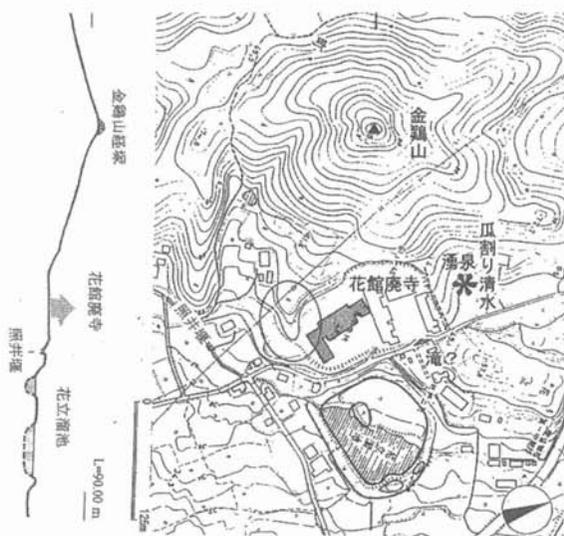


図3 花館伽藍図（前川2008に加筆）

（基図は昭和39年都市計画図。楕円部は、金鶏山から延びる尾根。現状では確認できない）

では、毛越寺庭園は誰が指導したのだろうか。

二、毛越寺の造営と庭園（図四）

毛越寺の造営に関して筆者は、毛越寺伽藍が法勝寺の系譜をひくことから、基衡治世初期の陸奥守源信雅（一一二八在任？、一一三一一一三四在任）と甥の顕俊（一一二九陸奥守見任？）の縁戚関係に注目した。顕俊の母は法勝寺を造営した高階為家の女である。基衡は信雅と顕俊を介して法勝寺造営の技術や知識を得たと想定した（前川二〇〇〇）。源信雅は右大臣顕房を父にもつ村上源氏で、遠藤基郎氏は基衡と協調関係を結んだ陸奥守とされる（遠藤二〇一五）。顕俊は信雅の兄の権大納言雅俊の男である。高階為家は、白河天皇の意を受け、法勝寺の金堂・講堂・回廊・大門・鐘楼・経蔵を造進した（『承暦元年十二月法勝寺供養記』）。それは「注文」が記す毛越寺の伽藍構成とほぼ同じで、近年八重樫忠郎氏が提示された一期目の毛越寺の構成建物でもある（八重樫二〇一三）。為家の三男為遠は康和五（一一〇三）年十一月に尊勝寺の中堂・食堂を「八万石疋」を投じて造営した功を顕俊に譲り、顕俊は武蔵守に任命されたという経緯がある（『本朝世紀』康和五年十一月一日条）。高階氏と顕俊の深い縁を示している。

実際、平泉では御願寺や院御所に使われた瓦と同じものが出土している。それらは鳥羽殿や六勝寺に供給されていた山城系や丹波系、讃岐系の瓦で、清衡期に遡ると考えられる（上原二〇〇一、鎌田二〇一四・二〇一五）。瓦は、御願寺や院御所の造営の担い手との人的関係により平泉にもたらされた可能性が高い。同じように法勝寺の情報も平泉へもたらされたと考えられる。

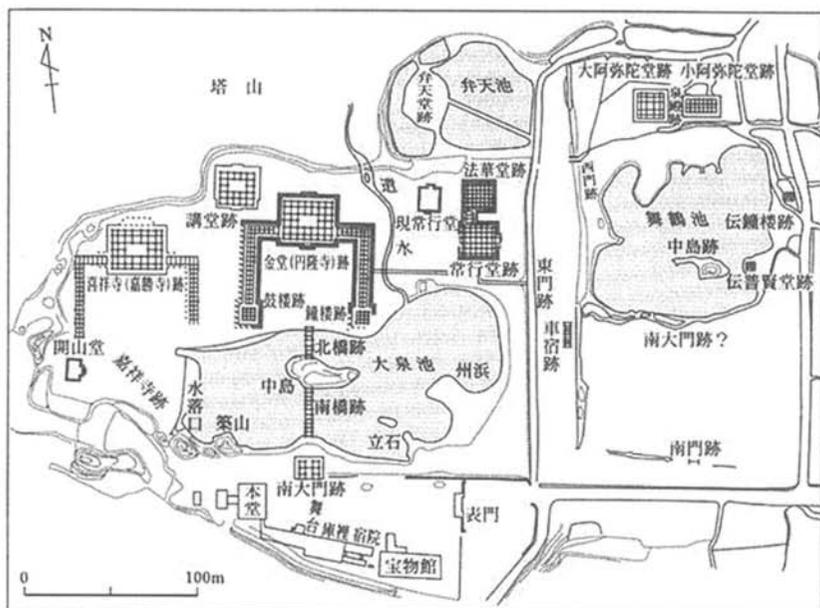


図4 毛越寺と観自在王院

(入間田2003所収図。基図は藤島1995より)

また基衡には、京都とのパイプ役として覚法法親王がいた。覚法は、源信雅の甥にあたる。信雅の姉妹の師子は藤原忠実の正妻で、忠通・泰子を産んでいる。そして忠実へ嫁す以前に白河院との間に仁和寺覚法法親王を儲けたことは周知のとおりである。遠藤基郎氏は、信雅が覚法法親王家の公卿別当であった時に〔「中右記」大治四年正月二十二日条〕、覚法と基衡との接触がはかられたとみる。そして基衡期における覚法の存在を重視し、円隆寺の額を忠通が、色紙形を藤原教長が書いたのも〔注文〕覚法を通じての依頼とされる（遠藤二〇一五）。

では庭園は誰の造営なのか。毛越寺庭園が『作庭記』の記述にならった意匠をもつこと、平泉の庭園には摂関家や仁和寺関係者の関与が考えられること、京都と平泉の強力なパイプ役であった覚法法親王に近い人物と想定されることなどから、筆者は法金剛院の庭を造った徳大寺

静意の可能性を考える。

静意（一〇六九～一一五二）は藤原師実の男で、忠実は甥にあたり、母は源頼国女で花山院家忠と同母である。醍醐寺義範の弟子となり、徳大寺頼観より受法した。法眼、法印を経て徳大寺別当となり同寺に住した。また嘉祥寺別当も務めた（曾根正人『平安時代史事典』）。田村剛氏によると「山水並野形図」の相伝を受け、橘俊綱から『作庭記』が伝えられた可能性が指摘される庭作りの専門技術者である（田村一九六四）。

待賢門院藤原璋子御願の法金剛院は大治五（一一三〇）年に建立された。供養の導師を覚法法親王が、造営を播磨守藤原基隆が請け負い、池庭を伊勢公林賢と静意が造っている。林賢は現在も「青女の滝」として残る滝を造り（『長秋記』大治五年五月十七日条）、それを女院の希望でさらに高くしたのが静意であった（『長秋記』長承二年九月十四日条）。

近年、菅田慶信氏によって、三井寺の範覚と先述した陸奥国に住んだという仁和寺の行範は、法金剛院を造営した基隆の弟であり、範覚は保延四（一一三八）年の基衡による千部一日経の問者であることが明らかにされた（菅田二〇一四）。さらには行範の師の寛助、寛助の扶持を受けた覚法とのつながりを重視される（菅田二〇一四）。法金剛院造営によって、基隆流、覚法、静意の三者はつながる。

このように考えを巡らすと、毛越寺は、法金剛院造営以降、基衡治世の前半期に造営計画し、着手されたと想定できよう。

毛越寺の造営時期は、「注文」の「一毛越寺事」に記される人物の在官時期から一一四一年～一一五六年とする説（大矢二〇一三など）や、発掘調査資料を見直された八重樫忠郎氏によって柱状高台かわらけ以後のかわらけが出現する第三四半期前半とする説（八重樫二〇一三）が出されている。そのため当該期の陸奥守藤原基成やその父・

忠隆の協力が想定されている（遠藤二〇一五）。

ところで、毛越寺の造営は平泉を都市の形にする大土木工事と関連する。毛越寺が造営される以前、当地は西からの沢筋にあたり、その沢は東隣の観自在王院敷地も横断し、さらに東の鈴沢池の低地へとつながっていた。毛越寺と観自在王院の間の調査で検出された元沢筋からは、木製品とロクロかわらけが出土し、手づくねかわらけがみられないので、整地地業は十二世紀中葉以前と想定される（及川二〇〇一）。毛越寺からも十二世紀前半代の柱状高台かわらけが出土しており（八重樫二〇一三）、造営時期と使用遺物にはタイムラグがあることを考慮するなら、大地業と毛越寺造営は十二世紀前半の造作と考えられる。

この整地事業は、次なる段階で街区形成されることが念頭に置かれた平坦面の確保と考えられ、都市平泉のグラウンドプランに大きくかかわった。毛越寺造営に関与した人物は、平泉の都市計画の指導者とも推察される。

三、御室地域と毛越寺

静意が住んだ徳大寺は、平安京北西の御室地域にある。衣笠山の南麓、龍安寺の東南に想定されており（古藤二〇〇二）、現在の立命館大学構内明学館あたりとなる（図五）。昔そのあたりに大きな池があったという地元の方のお話も聞いており、住坊にも庭が造られていたのである。

御室地域は、大内山の南麓で、中央に双ヶ岡の独立丘陵があり、南東には五位山とその麓には法金剛院がある。当地には仁和寺をはじめ、御願寺として四円寺が造営される（図五）。円融天皇の勅願で永観元（九八三）年に建立された円融寺は現在の龍安寺境内地と考えられており、寺域にある大きな鏡容池は、平安時代から続く池である。

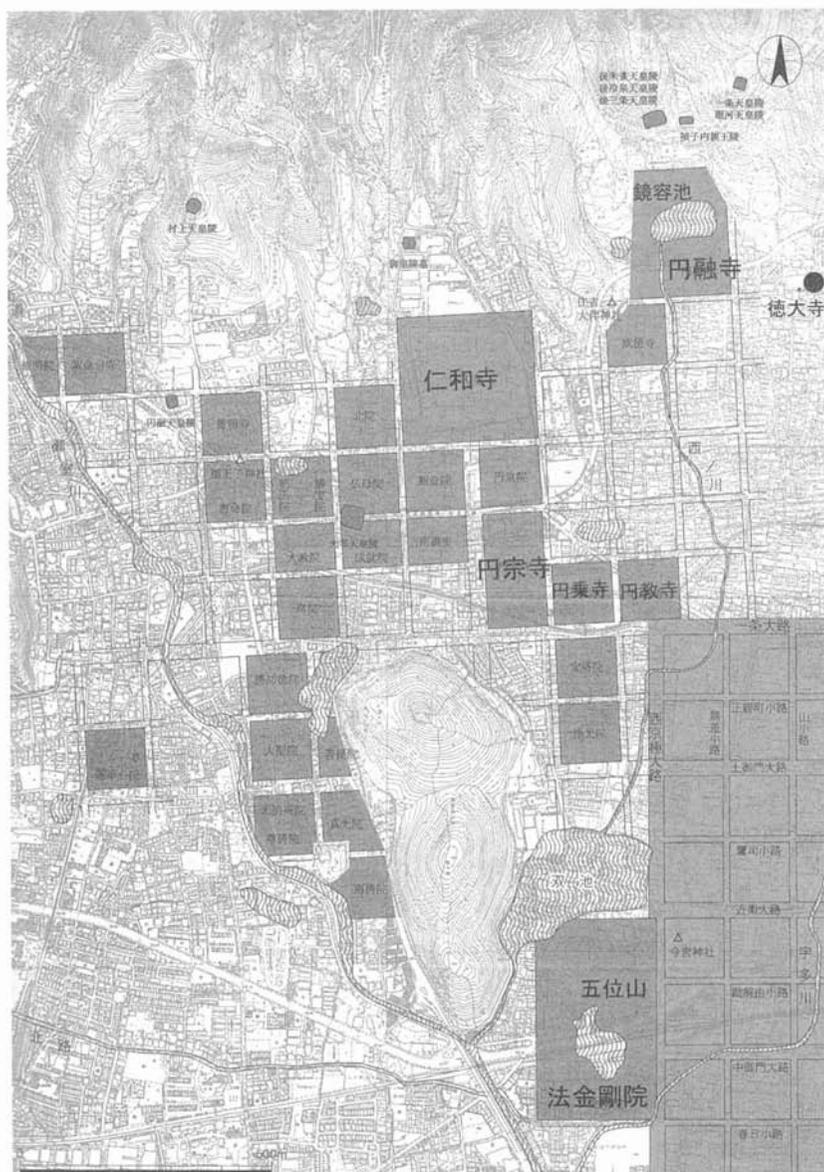


図5 御室地域復元図（上村2004に加筆）

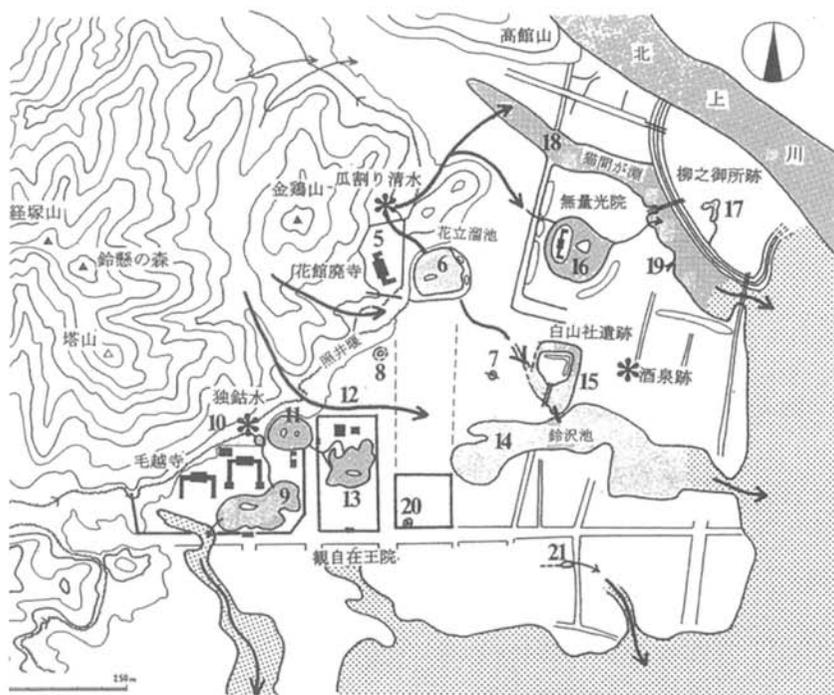


図6 水が巡る平泉想定図（秀衡期も含む）（前川2008）

寺の北には朱山が位置する。朱山は、「主山」である。寺院背後に山があり、山一寺一池と並ぶ風景は、平泉の浄土庭園の立地とも通底し、風水思想でいうところの「背山面水」を表現していると思われる。「依_レ高築_レ山、就_レ窪穿_レ池。龍虎協_レ宜、即是四神具足之地也」（『中尊寺供養願文』）の通り、平泉の浄土庭園にも風水思想がみてとれる（前川二〇一三）。御室の丸い山々から流れ出る水脈の利用の仕方など、水が巡る平泉との共通性もうかがえる（図六）。衣笠山を南からみると、頂部の丸い三角形の山にみえ、平泉の金鶏山とも似通っている。

毛越寺金堂「円隆寺」は「四円寺」を、基衡が手がけ秀衡が完成させた「嘉勝寺」は「六勝寺」を意識して寺号が定められたといういくつかの説がある。寺号決定のシステムを明らかにした菅田慶信氏によると、

寺号は京都でも為政者の世俗的な思惑・価値判断によって決定されていたから、毛越寺の寺号も基衡による寺院表象として「撰」されたという（菅田二〇一四）。

筆者は京都と平泉を比較する中で、洛東の白河や洛南の鳥羽と平泉の類似性を指摘してきた。これまで述べてきたように御室地域も例に加えられると、「円隆寺」の寺号は示唆している。

おわりに

平泉の浄土庭園の造営には、京都や奈良で庭作りに携わった人々、とりわけ『作庭記』を受け伝える撰関家関係者や仁和寺関係者がかかわったと考えられた。

毛越寺の造営には、基衡治世初めの陸奥守源信雅と甥の顕俊とつながる人々の協力が考えられた。庭園には仁和寺僧静意、法金剛院を造営した藤原基隆関係者の関与が想定される。これらの土木技術は都市平泉造りにもかかわった可能性を示した。

静意が住んだ徳大寺の後ろに聳える衣笠山の山容は、東南方向から見ると毛越寺裏の塔山と非常によく似ていると（写真一・二）、筆者は立命館大学博士前期課程在学中から想い続けてきた。もし、静意が毛越寺造営にかかわっていたなら、彼も平泉で筆者と同じことを思い感じたのではないか。

平泉は、これまで白河や鳥羽、法住寺殿周辺、撰関家の宇治と比較されてきたが、新しく御室地域を加えてみた。大方の御叱責を賜りたい。



写真1 平泉・塔山の山谷（志羅山地区より）



写真2 京都・衣笠山の山谷（立命館大学構内より）

注

(1) ただし、ほぼ同形の中島は、近年の浄瑠璃寺庭園整備発掘調査成果によると鎌倉時代に築かれた盛り土造成であり(浄瑠璃寺庭園第二次発掘調査現地説明会資料)二〇一二年)、中島の形は観自在王院が先行することも考えられる。

(2) 『中右記』大治四(一一二九)年正月六日の叙位の記事には、「従四位下源顕俊(陸国)」「(へ)は割注」とみえ、陸奥守と判断されるのであるが、保延元(一一三五)年六月日付の藤原敦光申文には、信雅が大治三年正月に陸奥守に補任されたとみえる(『本朝統文粹』巻六)。

【参考文献】

- 伊藤延男 「浄瑠璃寺」『大和古寺大観』第七巻 岩波書店 一九七八年
- 入間田宣夫 『日本史リブレット一八 都市平泉の遺産』山川出版社 二〇〇三年
- 上原真人 「秀衡の持仏堂―平泉町柳之御所遺跡出土瓦の一解釈―」『京都大学文学部研究紀要』第四〇号 二〇〇一年
- 上村和直 「御室地域の成立と展開」『仁和寺研究』第四輯 二〇〇四年
- 遠藤基郎 「平泉藤原氏と陸奥国司」入間田宣夫『東北中世史の研究』上巻 高志書院 二〇〇五年
- 遠藤基郎 「基衡の苦惱」柳原敏昭編『平泉の光芒』吉川弘文館 二〇一五年
- 大矢邦宣 『平泉 浄土をめざしたみちのくの都』河出書房新社 二〇一三年
- 及川 司 「十二世紀前半期の平泉」『都市・平泉―成立とその構成―』日本考古学協会二〇〇一年度盛岡大会研究発表資料集 二〇〇一年
- 鎌田 勉 『平泉町花立Ⅱ遺跡出土の瓦について(その一)』『岩手県立博物館研究報告』第三一号 二〇一四年

鎌田 勉 「平泉町花立Ⅱ遺跡出土の瓦について(その二)」『岩手県立博物館研究報告』第三二号 二〇一五年

(財)京都市埋蔵文化財研究所編 『院政期の京都 白河と鳥羽 付法金剛院・法住寺殿』京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所
二〇〇七年

工藤圭章 「円成寺」『大和古寺大観』第四卷 岩波書店 一九七七年

古藤真平 「仁和寺の伽藍と諸院家(下)」『仁和寺研究』第三輯 二〇〇二年

司東真雄 「中尊寺初期経営の宗派観」『岩手史学研究』一七 一九五四年

田村 剛 『作庭記』相模書房 一九六四年

角田文衛 「平泉と平安京―藤原三代の外交政策―」『奥州平泉黄金の世紀』新潮社 一九八七年

野口 実 「法住寺殿造営の前提としての六波羅」『院政期の内裏・大内裏と院御所』文理閣 二〇〇六年

藤島亥治郎 『平泉建築文化研究』吉川弘文館 一九九五年

菅田慶信 「日本中世仏教のなかの平泉」『平泉文化研究年報』第一三号 二〇一三年

菅田慶信 「平泉仏教の歴史的性格に関する文献資料学的考察」『平泉文化研究年報』第一四号 二〇一四年

菅田慶信 「院政期平泉の仏会と表象に関する歴史学的研究」『平泉文化研究年報』第一五号 二〇一五年

前川佳代 「平泉の都市プラン」『寧楽史苑』第四五号 二〇〇〇年

前川佳代 「平泉の苑池」『平泉文化研究年報』第一号 二〇〇一年

前川佳代 「苑池都市」平泉―浄土世界の具現化―『平泉文化研究年報』第八号 二〇〇八年

前川佳代 「奈良と平泉 なら学談話会報告」『奈良女子大学文学部 研究教育年報』第八号 奈良女子大学文学部 二〇一一年

前川佳代 「平泉の宗教施設と風水思想」『都城制研究(七)』奈良女子大学古代学術研究センター 二〇一三年

前川佳代 「平泉の馬場殿―平泉・鳥羽・宇治」 館野和己編『日本古代のみやこを探る』勉誠出版 二〇一五年

前川佳代・島原弘征 「平泉無量光院の造営プラン―GISの利用にむけての試論―」『古代学』第六号 奈良女子大学古代学学

術研究センター 二〇一四年

丸山 仁 「奥州平泉と京―撰閥家を中心に―」入間田宣夫編『東北中世史の研究』上巻 高志書院 二〇〇五年

森 蘊 『中世庭園文化史』奈良国立文化財研究所学報第六冊 一九五九年

森 蘊 『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所十周年記念学報（学報第二三） 一九六二年

森 蘊 『作庭記の世界』NHKブックス 一九八六年

八重樫忠郎 「平泉・毛越寺境内の新知見」橋口定志編『中世社会への視覚』高志書院 二〇一三年

八重樫忠郎 「シリーズ「遺跡を学ぶ」一〇一 北のつわもの都平泉」新泉社 二〇一五年

〈キーワード〉

京都 平泉 浄土庭園 都市 奥州藤原氏 撰閥家